

☆高校・一般の部〈特選〉

中陰の花を読んで

―目に見えるもの、見えないもの―

中嶋 美枝子

読書の感想というのは読む人のその時の体調、気分、置かれた状況などに大きく影響されるものだということ、この本を読んでつくづく感じました。

と、いうのも最初に読んだのは一昨年自分が活動している会の主催で著者である玄侑宗久先生の講演会を企画した時でした。「直木賞受賞作を読んでいないのは大変ー」と慌てて読んだのを覚えています。内容についても、一つ一つの言葉が難しく、仏教独特の言葉は特に難解に思えました。ただ、読書後の先生の講演の拝聴と、懇親会での会話から、年齢も近い、同じ時代を生きてきた共通の想いや、「僧侶」という職業ではなく、人としての先生に強く心が惹かれました。

そして昨年十一月、三十二年共に暮らした舅を亡くし、日々の仏事を行っている、「何だろうこの感じ、こんなことがなにかに書いていたような」そんな思いで忙しい日々を過ごしていたのですが、四十九日を終え、はっきりとあの感覚は「中陰の花だ!」と解り、むさぼるように読んだのです。

「中陰」という言葉の意味を、主人公の則道が、妻の圭子

に苦勞しながら教える場面があるのですが、「仏教の質量不滅の法則の考え」をコップの水が蒸発し、しばらくこの辺にあり、例えば鉄瓶の湯気が立ち上る様を「中陰と呼ばれる状態」この世とあの世の中間ということ、そして水蒸気はどんどんひろがり窓から出て空いっぱい広がっていく。膨らんでいく。広がっていく。それが「空」コップの水はコップからはなくなつたけど、あまねくゆきわたり、この地球上からはなくなっていない。と……

何か、最近ブームになつている「千の風になつて」の詩と同じ様なフレーズに心が揺さぶられ、自分の忌中の時の心境と同じように感じられたのです。また、お寺とは縁のない所から嫁いできた妻に対して、仏教について少しでも解つてもらう為、解りやすいように主人公が話している姿にやさしさが感じられ、難しい言葉も心温まる場面に思えました。

主人公の則道は「おがみや・ウメさんの死」から霊的現象について興味を持ち「流行りのおがみや」を訪ねたり、新興宗教に走つたと噂されていた天の湯の徳さんを訪ねたり、妻ともたびたび会話をしているのですが、仏教の住職でありながらも、けつして一方的に否定するのではなく、ひたすら話を聞く姿勢、そして、しだいに「この世とあの世の中間」中陰」を受け入れていく姿がとても身近に感じられ「人間らしさ」に何故かほつとしたのです。

また、妻の圭子が流産した「我が子」をずっと心の奥底に

想い続けていた事、想いの深さに気づかずにはいた事や、それからしだいに妻の心の中に仏教的心が育まれていたのではないかと言葉の端々にうかがえるのですが、意外に気づかない則道に親しみを感じるのです。

悲しみを乗り越えようと始めたのでしょうか、包装紙の紙縒つくりですが、紙縒をシートにして本堂の天井からつるし、我が子の供養を夫である則道にしてもらおう場面で、その時まさに紙縒の群れが震えるように揺れだし動きが止まっても煌めき「中陰に咲く花だ」と則道に思わせたのです。

私には一本一本に込められた妻圭子の想いがこのような現象を引き起こしたのだと思えるし、この現象を二人は見えたのですが、他の人に見えたかどうかは解らないと思うのです。見える、見えないは「その人の様々な想い」が大きく影響していると思うのです。このような現象に対して科学的解明という事を研究している人もいますが、「人は死んだらどうなるんだろう?」とか「成仏するまで四十九日かかるんだ」「中陰ではいろんな現象が見えたりする事もあるんだ」そんなことを考える事ができる一冊でした。ちなみに舅が亡くなって二週間、いつもの長いすに横になって居て、夕食の時間に家族がテーブルに着くとフワフワと雲のように動いていました。私の様々な想いが見せてくれたのだと思う事ができました。

この様な体験をした事のある方は沢山いると思うのですが、

形として見える物だけではなく心の目で物を見る事の大切さについてもこの本は、語っているように思いました。

#### 〈講評〉

様々なことを、現実と重ねて位置づけ、次へ結びつけていく。そして、生きる方向を見出し出していく。まさに、読書の楽しみと意義を感じさせる作品です。



相 棒  
鷹巣中学校  
2年 田 口 千 春